

1 学期終業式に贈る校長メッセージ

今年の7月は、中旬に入っても梅雨寒が続き、1学期期末試験只中、土用の丑の日を過ぎて梅雨前線が空を覆って、盛夏の季節に相応しい灼熱の太陽に出逢えない降雨の日々の連続でした。新型コロナウイルス感染症パンデミックによる休校措置に始まった2020年度一学期は、先行きが見えない様相を呈する社会状況の中、学院生活も季節も異例づくめで結びを迎えました。一堂に会することができない変則的な形ですが、本日、終業式ができますのは、在校生のがんばり、保護者の皆様の御心遣い、教職員の尽力をはじめとする光塩ファミリーの一致団結の賜物と、心より感謝申し上げます。

6月1日から分散登校による学院生活を再開し、期末試験を実施することは叶いましたが、7月下旬には、新型コロナウイルスの感染者が東京で累計1万人を超え、都内の一日の感染者数が300人を上回り過去最多を、更新した日もあり、私たちが未だ危機(クライシス)の渦中にいることは明白です。事態をしっかりと見極めて、「熱中症に気を付けてマスクを使用する」「三密を避けて行動する」「手洗いうがいを励行する」「ドアノブやタッチパネルにも気を付ける」等、油断なくリスクへの対策を立てることが肝要です。

さて、先週終了した期末試験では、今学期の学びの集約ができたでしょうか。試験が終わったからといって、折角覚えて整理した知識や思考方法を忘却の彼方に「心太(ところてん)」を押し出すように追いやってしまうのは、余りに勿体ないです。試験が終わった今こそ、全体像の把握と、具体的な知識の整理と習得の徹底に努め、次なる課題にチャレンジしましょう。

新型コロナウイルス感染症パンデミックにより、この半年余りで様々な社会システムが変容し、新たな問題が露呈しました。生活のための経済活動を優先にするか命を守るための自粛生活を要請するかという政治課題は、自由か安全かの選択であると同時に、規制による監視社会の到来を危惧させました。また、休校中の学校においても、今迄当たり前だった対面のリアル授業ができなくなり、将来に向けてプランニングしつつあったオンライン授業を緊急導入する等、教育の場は大きく変わりました。更に、国際社会においては、感染症対策で各国が連帯しての国際協力が不可欠な局面であるはずなのに、米中対立をはじめ自国第一主義が目立ち、更に分断が広がりつつあります。これら、政治・教育・国際問題で課題となっている「経済(自由)vs 命(自粛等による規制)」「リアル授業(アナログ)vs オンライン授業(デジタル)」「自国第一主義(ナショナリズム)vs 国際協力(グローバリズム)」という捉え方は、近代以降の社会において基盤にされてきた二項対立の概念です。

例えば、環境問題を考える上で、「開発 vs 保護」のどちらを優先するかといった二者択一の選択をして、ダムや原発の建設等が進められてきました。しかし、今、環境問題の解決のために必要なのはSustainability(持続可能性)です。『回勅ラウダート・シ ともに暮らす家を大切に』の中で、教皇フランシスコが人間の活動が自然環境に与える影響や、私たちが将来世代に対して担うべき責任に就いて問いかけ、「地球という家」の環境を守るために示された生き方の指針は、私たちの精神的拠り所になります。この度の新型コロナウイルスパンデミックは、人間が神様から創られた自然の懐の中で生きているということを強く実感する機会になりました。人間は「万物の霊長」などという傲りを棄てて、通時的にも共時的にも

地球環境の生態系の中で命ある全ての存在と共生していることを銘肝し、自然、そして神様への賛美と感謝を捧げたい思いです。

この生き方の実現には、二項対立のうちのどちらかを選ぶ二者択一では解決を得られず、両者を融合(Fusion!)した「第三の道」にあたる思考が必須になります。コロナウイルスに対しても、ウイルスの撲滅を目指すのではなく、コロナウイルスと共生して暮らす「ウイズコロナ」という姿勢が一般的になりました。これからは、「西洋 vs 東洋」「伝統 vs 近代(現代)」等の二項対立の限界を超えて、ウイズコロナで始まった「対面のリアル授業と双方向のオンライン授業の併用」をポストコロナ時代にも展開していくといった、新たな視点での取り組みが重要になります。また、「経済 vs 命」の問題も、フランスの思想家ジャック・アタリ氏が提唱する命を重視した経済システムの構築等、新機軸への移行が焦眉の急です。新型コロナウイルス感染症の影響で「未来が早くやって来た!」という新世界が始まろうとしているのです。

イタリアの物理学者で作家のパオロ・ジョルダーノ氏の言、「僕たちは今、地球規模の病気にかかっている最中であり、パンデミックが僕らの文明をレントゲンにかけているところだ。数々の真実が浮かび上がりつつあるが、そのいずれも流行の終焉とともに消えてなくなることだろう。もしも、僕らが今すぐそれを記憶に留めぬ限りは。」(『コロナ時代の僕ら』早川書房)を心に刻み、コロナ以前と異なる世界に向けての歩みを進めてゆきたいものです。

光塩でも、この夏、皆さん1人ひとりにデジタル・デバイスを一台ずつ準備していただいて新型コロナウイルス感染症パンデミック第2波・第3波に備えると同時に、校内にBYOD回線を新たに設置し、ポストコロナの時代において、紙と鉛筆という文具に加え、新しい学びの道具としてデジタル・デバイスを用い、リアルとオンラインを融合した高度な学習環境を創出していきます。

現代社会は、感染症の問題だけでなく人知を超える自然災害、国際情勢・テロ等、かつてガルブレイスが指摘した「不確実性の時代」よりも更に不測の事態に溢れた状況にあります。確固とした正解のない問いに直面する日々、今迄の当たり前や、常識が通用しない時代を乗り越えるためには、ブレイクスルー的な型破りな発想が解決の突破口になるのではないのでしょうか。型を破るために必要な、基盤となる「型」を身につけるのが中高時代であり、今が学びの正念場です。

さて、新しい入試制度下での大学受験を控えた高3の皆さん、今は、天下分け目の天王山である夏休みを前にという定番の言いまわしでは、的を射ない状況かもしれません。まずは、兵法通り、敵を知ることが肝要です。変更事項・出題傾向をしっかりと分析したうえで、現時点での自らの達成度をきちんと認識し、到達すべきラインと現状の実力とのギャップを埋めるところから丁寧に始めてください。例年の約40日の夏季休暇でも、日曜日のサザエさんが6回放映されたら2学期です。今回は、更に短いですから、夏の日々に過大な期待をしすぎず、「平常心是道」を貫いて淡々とノルマを熟すことをお勧めします。小論文を使う予定の方は、隙間時間を使っての種仕込みにも励んでください!

最後に、4月に開催できなかった光塩祭をオンラインで実施することになり、6月の分散登校以降、特に高3の皆さんには、新たな形での企画をお願いすることになりました。このオンライン光塩祭を誠心誠意、準備・運営して下さった2019年度の総務委員会・クラブ委員会のメンバーの皆様、本当にお疲れ様でした。本来4月に引退し、夢の実現に向けて集中する時期の只中の作業になってしまった高3の皆さんにお詫びするとともに、長きに亙る尽力に心より感謝申し上げます。オンライン光塩祭は、この後、卒業生

の力も借りて編集作業を進め、2学期初頭を目標に校内公開を目指す予定です。

そして、本日を以って、2019年度総務委員会・生活委員会・クラブ委員会の仕事の締めとして、2020年度の各委員会メンバーへと引継ぐこととします。前年度メンバーの輝かしい成果を壽ぎ、新年度メンバーの更なる大活躍を期待しています。

短い夏季休暇期間、また、夏の楽しい行事である山荘生活・クラブ活動・オーストラリア短期留学等が実施できず残念至極ですが、日々、一瞬一瞬を大切に自分と向き合い、行動に際しては、今、何をどのようにすべきかを一步立ち止まって考え、「すべてのいのちを守るため」を第一義に、気概と覚悟を持って過ごしてください。

皆さんと御家族の皆様の御健康をお祈りしています。

ホスピタリティ溢れる、素敵な日々でありますように！